

古文書に見られる九重火山の噴火*

Eruptions of Kuju volcano revealed by human documents

地質調査所**

Geological Survey of Japan

はじめに

九重火山の歴史時代の活動については、これまでもいくつかまとめられてきた^{1),2)}。鎌田³⁾と鎌田・小林⁴⁾はこれらを整理し、1738年・1675年・1662年の3つの記録が噴火を記述したものと考えた。今回これらの史料の原典にてきるだけあたり、火山現象の再検討を行ったので、以下にその概要を紹介する。

噴火記録の再検討

九重火山の噴火あるいは異常の記録としては、享和三年(1803年)、寛保二年(1742年)、元文三年(1738年)、延宝三年(1675年)、寛文三年(1663年)あるいは寛文二年(1662年)のものが一般に知られている。今回新たに安永六年(1777年)の記録を大分県立先哲史料館の赤峯重信氏の協力によって得ることができた。以下に記録の日付と古文書を記す。

- (1) 享和三年(1803年)：『豊後国志』、『豊国小志』
- (2) 安永六年(1777年)：国東半島にあった下岐部村(現在の東国東郡国見町)の庄屋(有永氏)の文書
- (3) 寛保二年正月八日(1742年2月12日)：震災予防調査会⁵⁾に記載された「硫黄坑より吹き抜く(今村理学博士の調査による)」
- (4) 元文三年六月二十八日(1738年8月13日)：『皆田家宝暦九年の旧記録』
- (5) 延宝三年五月(1675年6-7月頃)：『皆田家宝暦九年の旧記録』
- (6) 寛文三年正月八日(1663年2月15日)：震災予防調査会⁶⁾、理科年表⁷⁾
- (7) 寛文二年正月八日(1662年2月26日)：『岡藩小史』、『九重山記』、『竹田領郷中覚書』、『皆田家宝暦九年の旧記録』

上記(1)から(7)の活動について、入手できた史料を見る限り、“マグマが噴出した”と積極的に解釈できるものはない。特に(3)と(6)は記録を転記する際の誤り、(1)は記録の解釈の誤りと考えられる。それ以外のものも噴気地帯における異常を記録しただけのものである可能性が高い。

(2)、(4)および(5)などに当時としては山奥にあった硫黄山周辺での小規模な活動が詳しく記載されているのは、硫黄山の硫黄が重要な資源であったためであろう。寛文二年正月八日(1662年2月26日)の活動は複数の記送が認められることから、(2)、(4)および(5)の活動に比べれば、規模が大きかったと考えられる。しかし、同じ頃の阿蘇火山の噴火記録には「火石・黒煙」などの噴火を示す直接的な言葉が頻繁にみられること、その阿蘇火山の降灰に悩ませられていた人達がこの時の活動による降灰の記載をまったくしていないことから考えると、この1662年の活動も噴火と言うよりもやや規模の大きい噴気突出事件であった可能性が高い。以上のように、これまで九重火山の噴火記録とされていたものの多くは、“噴火”というよりも噴気地帯の小規模な爆発あるいは噴気突出事件を記述したものと考えられる。

参 考 文 献

- 1) 福岡管区气象台(1965)：九重山，福岡管区气象台要報，20，3-4.
- 2) 村山 磐(1990)：九重山，日本の火山(Ⅲ)増補版，大明堂，東京，3-4.

* Received 20 Dec., 1995

** 鎌田浩毅，井村隆介
Hiroki Kamata and Ryusuke Imura

- 3) 鎌田浩毅(1991): テフラの¹⁴C年代により明らかにされた九重火山の噴火史, 日本火山学会秋季大会演旨, 71.
- 4) 鎌田浩毅・小林哲夫(1992): 九重火山の地質と完新世における噴火活動史, 日本地質学会第99年大会(熊本)演旨集, 415.
- 5) 震災予防調査会(1918): 九重山(星生山)噴出. 震災予防調査会報告, 86, 203. (日本噴火志上編)
- 6) 震災予防調査会(1941): 増訂大日本地震史料第二巻. 754 p. (復刻版, 1975, 鳴鳳社)
- 7) 国立天文台編(1995): 理科年表平成8年版, 丸善, 東京, 1043 p.
- 8) 大分県(1983): 九重硫黄山. 大分県史近世篇I, 大分県, 531-533.